

## 小平市都市農地シンポジウム

### 「どうなる？“プチ田舎”小平の都市農地」会議要録

#### 1 開催日時及び場所

日時：平成30年1月21日（日）10時00分から11時30分まで

場所：ルネこだいら レセプションホール

#### 2 登壇者及び来場者数

【パネリスト】（順不同、敬称略）

菊地 俊夫 首都大学東京 教授・小平市農業振興計画検討委員会委員長

高橋 清一 小平市農業委員会 前会長

岡部 明子 東京大学大学院 教授

中井 検裕 東京工業大学 教授

小林 正則 小平市長

【コーディネーター】

関 幸子 小平市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進委員会委員長

【来場者数】

102名

#### 3 内容(要旨)

関 本日は日曜日の午前から沢山の方にお集まりいただきありがとうございます。  
小平市は、都心に近いながらも農地がまだ多く残っている特別な地域。私は母の実家が小平市小川町にあり、子どもの頃からよく来ていた。今は、小平市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進委員会の座長を務めさせていただいている。  
まず、各パネラーの方から、自己紹介を兼ねて一言ずつお願いしたい。

菊地 産業振興基本計画、農業振興計画で検討委員会の座長を務めている。市民アンケートの結果を見ると、農地は誇らしい資源と認識されていることがわかる。私の専門は地理学や観光科学であり、座長として計画に携わる以前は、農空間は都市住民の癒しとして重要という認識を持っていたが、計画策定で色々な方とお話しする中で、農空間ではなく農業空間、「業」の存在を小平市の大きな特徴として感じるようになった。これは、必ずしも他の都市農地では見られな

いこと。どのように「業」を残していくかが大切。

岡部 私は都市農地や農業が専門というわけではないが、関さんに誘われて小平を見せていただき、実際に野菜も買って、良さや面白さを感じた。

近年、都市に「農」が必要と価値観が変わったことは、都市の側の都合。一方、農業側から見ても、都市にあるということは重要と思う。アメリカのデトロイトでは、人口減少の中で都市農業が台頭してきている。20代の若者が「大規模農業に未来はない。消費者に近い都市農業にフロンティアを見出した」と言っている。

中井 都市計画が専門で、国土交通省の委員会の取りまとめなどを行っている。私が学生の頃は、農地は都市にあるべきものではないとされていた。1968年に都市計画の仕組みで都市と農村に線引きをして以来、その状況が続いてきたが、この10年で大きく風向きが変わってきている。人口減少やCO<sub>2</sub>排出等の環境問題が背景にある。都市農業振興基本法が出来た影響で、用途地区の中にも田園居住地域という区分が新たに創設された。

農地は、誰かが耕作して初めて農地となる。「誰が」「どのように」使うかという点がパッケージになっており、議論が難しい。「誰が」と「どのように」を、つまり所有と利用を分けることも考えられる。都市農地は保全の方向性となっているが、その方法は模索中というのが現状。

高橋 昭和43年に新都市計画法が出来た。当時、私は22~23歳で、よくわからぬまま、市街化区域と調整区域のどちらを選ぶかという話をされた記憶がある。

その後、制度の変遷もありつつ、昭和60年頃にバブルが到来し、びっくりするような地価となった。練馬で1反(300坪)の畑が12億円という話も聞いたりした。テレビでも、農家の車庫にある高級車など放映され、雑誌でも都市農地が地価高騰を引き起こしているような論調があった。当時土地を売却した人は、確かに大金を手にしたと思うが、ただ農業をやる人間には何も良いことはなかった。当時、都市で農業をやっている人の心は荒れたと思う。

今になって、都市農地が減ってくると「残ってほしい」というのが都民の声で、近年は防災に必要な空間としてもクローズアップされている。仲間内では、「出て行けと言っておいて、今さらなんだ」と言う声もある。

ただ、先ほど関さんより、都市農業にとって今はチャンスという話があり、そうなんだなとも思った。農業支援策も私の若い頃より充実してきているのは確

か。うまく使えば飛躍のチャンスと言える。

市長 高橋さんのお話は、農家のナマの声で重みがある。小平の農家の決意を聞いた気持ち。私は米農家の三男坊で、18歳で東京に出てきた。小平市の人口は1962年に7万人程度だったのが、今は19万人。増えた人の大半は、私のように、農地が宅地化されて住んだ人。東京に集中した労働者の住まいを確保するのが、当時の国の課題意識だったと思う。市では、認定農業者制度にも力を入れ、農家の方を支援しながら、将来に渡って農業が継続するよう施策を進めている。岡部先生のデトロイトの話は、私もちょうどテレビで見て面白かった。多くの市民は都心に働きに出ており、心地よい生活空間で癒されることを望んでいる。自立的な農業を意欲のある方に継続していただくため、JAとも協力し、学校給食で地場野菜提供ということも支援している。市の面積の1割近くは農地であり、防災や環境、都市の品格という多くの面で、都市農地は重要と捉えている。後継者不足という状況もある中で、中井先生が言われていた「所有」と「利用」の分離も考えられるのではないか。

関 岡部先生に、アジアの状況を踏まえた観点についてもう少し聞きたい。

岡部 皆さん、憧れの農地というとフランスなどを思い浮かべるかもしれないが、先日、フランスの専門家と話す中で、観光化している南部などは確かにいいけれど、それ以外の農村は疲弊しているという話を聞いた。どの国も苦勞している点がある。

日本では都市と農村がきれいに分離していないことについて、都市計画がだらしないという見方もあるが、風土や文化の違いということもある。稲作ベースの国と小麦ベースの国では違いが出てくる。日本のように農地の生産性が高ければ、都市と農村の両方の良さを求めることができるとも考えられる。そうなるとゴチャゴチャはする。T. マッギーがインドネシアを観察してデサコタ的（農村と都市の区別がつかない）と表現している。

もともとの気候風土に素直に沿った、独自の都市計画を見出すチャンス。

アジア型のゴチャゴチャの中には、欧米型とは別のポテンシャルがあるのだとすれば、それをどう制度化し、折り合いをつけるか。

一番重要なのは、都市住民づくり。緑は歓迎するが苦情は言うということを改善する学びの場が必要。

関 中井先生、所有と利用の区分について、都市施設の考え方をを用いること等含め

てご説明いただきたい。法や制度を変える必要性なども。

中井 短期的な策としては生産緑地の貸借ということだと考えるが、長期的には様々な選択肢が考えられると思う。

緑地は大きく分けて、公園や公設緑地等の「施設」としての緑地と、ゾーニングによる地域制緑地がある。前者は公が土地を購入して維持管理していくこととなり、後者は民が所有する形で、場合によってはある程度の優遇等があったりする。生産緑地は後者のタイプ。今は生産緑地しか制度がないので、では前者による公有地化という発想も出てくるが、財政的に公共団体には限界がある。私は前者と後者の中間的なものがあると、長期的に良いのではと思っている。個人でも公共でもなく、中間的な主体が面倒をみる形。その中で、所有と利用を分けるような仕組みが出来ると良い。

農地の中でも、ここは残したいというような評価をしていくことが必要ではないか。どうしてもという所は公共が押さえ、それ以外は農家や市民、地域が皆で工夫していく。

農地に対する考え方は、関東と関西等地域差があり、中部圏だとまだまだ開発意欲が旺盛だったりもするため、全国統一的な考え方をとるのが難しい面もある。小平から発信し、小平版の仕組みや考え方が出来ると良いのでは。

岡部 中井先生に質問。先ほど関さんより、都市施設という話が出たが、個人所有のまま都市施設となることはあり得るのか。

中井 都市施設に指定をした場合、買い取り請求も考えなければならず、これは財政的に耐えられない。なので、地域の共有化等の方策を模索する方がよいのではないか。

関 都市農業振興基本法の本質だけでは、都市農地を守りきれない。均等相続も都市農地保全の面では課題の1つ。農地が個人所有のままでは、どうしても保全が困難になるのではという気がしている。高橋さんにお聞きしたいが、農地を次の世代に渡す際の問題点はどのようなことがあるか。

高橋 農地を残す方策については、これまでもずっと考えてきた。考えると、その農地で、農業で食っていけなければ残せないという結論に辿り着く。人生100年と言われる中、老後の資金を考えてもやはり金が必要。都市農業そのものについて肯定的な意見を持つ人、モデルになる人が小平にはいるので、金銭的に生活が成り立つのであれば、次も続くのでは。小平では新規就労が年に7～8人

おり、茨城の知り合いにそのこと話すと驚かれる。向こうは数年に1人。

関 農業で生計がたつようにすることが本当に重要と思う。菊地先生より、ここまでの話や策定している農業振興計画を踏まえたお話を教えていただければ。

菊地 ポイントとして4つ挙げたい。

1つ目は、今高橋さんからもお話しがあった、儲かる農業をいかに残すか。計画策定の中で色々と話を聞く機会があったが、群馬県の年商3億円というような農家の方が、小平の農業を「羨ましい」と言う。なぜなら、消費者の顔が見えるからと。消費者のニーズにじかに触れられるという利点を生かしていくことが重要。実際、小平市では80~90%の農家が直売所を経営しており、これが今後の1つの切り札。JAのファーマーズマーケットは、品薄になるほどの人気で、市民からも他駅への展開要望が出るほど。また、小平市では学校給食における地場野菜の活用も都内では先進的で、これも強み。私の乱暴な計算だが、東京都の食糧自給率は2~3%程度なのに対し、小平市は50%くらいと見積もることが出来る。地産地消で儲かる農業を残していく。

2つ目は、後継者・担い手の育成。こちらは、育成プログラムの参加者もいて、少しずつ育っている状況もあるので、どう生かしていくかということ含めて考えていくことになる。

3つ目は、ネットワーク。個人だけではなく連携することで、直売所にしても、強みを持ち寄ることが出来る。若い人のネットワークでマルシェ開催等することで、消費者のニーズに応えやすくなる。

4つ目は、少し私の個人的な考えにもなるが、お話しさせていただければと思う。私は文部科学省の支援も受けながら「日本農業の維持発展戦略」について研究している。その中で、佐賀市の事例としてあったのが、集落営農。これは、集落の中で熱心な人に営農を任せて収穫を分配する方式。そのような形で集落全体の農地を維持してきた。ただ、それも担い手不足となり、法人化する傾向にある。小平市でどこまでそれを参考に出来るかはわからないが、先ほど中井先生のお話にもあった「所有」と「利用」を分ける考え方、借地について考えていくことも今後重要ではないかと考えている。

関 これまでの話を聞いて、市長はいかがか。

市長 今日は大変多くを学ばせていただいた。岡部先生の言う市民の「学びの場」の必要性については、そのとおりに思う。小平市では、農地の隣は住宅地。緑は

良いと言っている、隣にあれば迷惑も感じる。学びの場で理解を促進していくことは重要。これは行政の役割とも言える。中井先生の言う「農地のランク付け」についても、私も必要と思う。将来に渡って残すべき農地と、地域に任せる農地というのがあっても良いのではないか。地域活動が盛んな所は豊かな社会だと思う。定年退職した後、農業をしたいという人は多い。土やコミュニティーを求める気持があるのだと思う。公と民の間というのは難しい面もあると思うが、何か考えていけると良い。菊地先生のお話では、生産販売がやはり基礎として大切ということを確認した。農業収入で生活できるよう市も支援していく。先ほど高橋さんから、都の支援策も充実してきているという話あったが、その辺もうまく活用していける環境をつくっていく。また、菊地先生のネットワークのお話についても、私もそのように思う。農家の若い方たちと交流することがあるが、彼らはインターネット等も駆使して多くの情報量を持っている。ファーマーズ・マーケットは人気で品切れも出ている。供給側も努力して期待に応えていただければと思う。

関 せっかくの機会なので、会場の皆様より、質問やご意見をいただければと思う。時間の関係でお二人まで。

質問者1 私は現在、農業委員も務めさせていただいている、農家の人間。農家は、相続の際に納税猶予という制度を活用しており、自分で農業経営をせざるを得ない状況にある。連携をしたくないのではなく、出来ない状況もあることをご理解いただきたい。また、都市農業継続のためには何が重要かとよく聞かれるが、作物（野菜等）を買っていただくのが何よりの応援。是非、よろしく願いいたします。（場内より拍手）

質問者2 農業委員を務めさせていただいている。都市農業振興基本法が制定され、都市農業の法体系での位置付けも変わった。従来は、都市計画と農業振興で別になっていたが、ゾーニングの話に農地・農業が大きく入っていくことになる。一体的な空間整備が求められるので、市の組織としても、新しいスキームで対応いただければと思う。

質問として、先ほど中井先生よりコモンズ（地域共有化）の話が出たが、特定生産緑地の指定を行う際、問題にはならないか。

関 そろそろ時間もきているので、今の質問に対する答えも含めて、中井先生から順に、最後に一言ずつお願いしたい。

中井 特定生産緑地については、しっかりPRして、制度として皆さんに使っていただけのが良いと考えている。

都市農地の一般的な状況として、アパート経営等も含めた中で生計を立て、農地を守ってきたということがある。ただ、これから人口減少となる中で、そのような経営が成り立たなくなっていく。そうなった時、公的な力や市民の力がないと、農地保全が難しくなると考えている。

岡部 色々なやり方がある、という話になると、どうすれば良いかわからなくなる面もある。後継者問題として、息子さんがサラリーマンになるとしても、その奥さんやお孫さんがやりたいと思うかもしれない。その時に、それが出来る状況がつかれると良い。長い目で見ると、土地所有の魅力は減ずることになる。土地の所有者を顕在化させずに、利用形態は臨機応変に、仮に途切れるときがあっても農業が継続するにはどうしたらよいか、という方向で考えたい。

関 土地の価値が減ずる中にこそ、都市農業のチャンスはあるとも言える。

高橋 お話に出てきた、アパート経営等を併用した農業経営が今後の人口減少等の中で難しくなる見込みについては、国の都市農業振興基本計画にも記載されており、受け止める必要がある。法の中でも「多面的な機能」を発揮するよう謳われているので、せっかく今ある農地について、生かしていきたい。次に続く人が意欲を持てる制度整備をお願いしたいし、都や市には支援をお願いしたい。

菊地 先ほどご意見もあったように、市民と農家が一体となって、市民は買い、農家はニーズに応えるということが重要と思う。私が農家の方とお付き合いする中で良かったこととして、「枝豆は採れたてが断然旨い」と教えていただいた。試したところ、本当にそうだった。産地と消費地が直結している良さがそういうところにもある。

市長 これだけのメンバーがそろっての話を聞ける機会はそうそうないと思う。一日話を聞いていても飽きないくらい。とても参考になった。

都市農地の保全は、行政だけでも、農家の方だけでも難しい。関係各所が議論して認識を共有していく必要がある。これから農業振興計画も策定されるので、この計画に沿いながら、農業を小平市の魅力として、将来に渡って残していくように努めることを改めて強く決意した。ありがとうございました。

関 本日は、日曜の午前中から、本当に多くの方にお越しいただき、小平市における都市農業に対する関心の高さを感じた。都市において農業を考えることは、

まちづくりを考えたことでもある。私としても、母の実家があるこの小平市が、都市農業の旗手として進んでいただけると嬉しい。ここに、JAや金融機関の方等もいらしていると思うので、また今後、関係機関も連携しながら取り組んでいただければと思う。本日は、誠にありがとうございました。